

第三回

中学生訪中親善使節団報告書

1994年3月27日～4月3日



財団
法人

Takamatsu International Association

高松市国際交流協会

目 次

I 団員名簿	1
II 日 程	2
III 使節団の活動状況	3
IV 感 想 文	9

高松市中学生訪中親善使節団団員名簿

団 長	蓮 井 宣 昭	(男)	財団法人高松市国際交流協会事務局長
引率教員	岡 正 敏	(男)	高松市教育委員会学校教育課指導係長
〃	小 西 一 郎	(男)	高松市立香東中学校教諭
〃	山 田 美 鈴	(女)	高松市立古高松中学校養護教諭
団 員	平 井 美 穂	(女)	高松市立桜町中学校 2 年生
〃	玉 井 建 也	(男)	高松市立紫雲中学校 2 年生
〃	吉 原 誠	(男)	高松市立玉藻中学校 2 年生
〃	三 宅 洋 子	(女)	高松市立光洋中学校 2 年生
〃	宮 川 讓	(男)	高松市立城内中学校 2 年生
〃	木 下 哲 夫	(男)	高松市立鶴尾中学校 2 年生
〃	神 納 陽 子	(女)	高松市立屋島中学校 2 年生
〃	小 河 亜紀子	(女)	高松市立協和中学校 2 年生
〃	河 田 早 代	(女)	高松市立龍雲中学校 2 年生
〃	平 尾 阿 貴	(女)	高松市立勝賀中学校 2 年生
〃	矢 野 洋 子	(女)	高松市立一宮中学校 2 年生
〃	山 下 洋 平	(男)	高松市立香東中学校 2 年生
〃	弾正原 えつ子	(女)	高松市立下笠居中学校 2 年生
〃	福 井 あすか	(女)	高松市立男木中学校 2 年生
〃	飯 間 圭一郎	(男)	高松市立山田中学校 2 年生
〃	加 藤 朋 香	(女)	高松市立太田中学校 2 年生
〃	岡 村 佳世子	(女)	高松市立古高松中学校 2 年生
〃	佐々木 英 登	(男)	高松市立木太中学校 2 年生
〃	西 尾 里 絵	(女)	香川大学教育学部附属高松中学校 2 年生
〃	香 西 永 恵	(女)	香川県明善中学校 2 年生



日 程

日次	月日		時 間	日 程	
1	3/27 (日)	↑	() ~21:30 12:00~12:20 13:00~20:10	出発式 高松発(大阪・上海経由)北京着 = 新万寿賓館	
2	3/28 (月)		北	(8:45~20:20) 10:20~11:50 14:30~16:30	明の十三陵 万里の長城
3	3/29 (火)	↓	京	(8:40~21:30) 9:30~10:45 11:00~12:10 14:00~15:15 16:30~20:30	中日友好協会 天安門広場・故宮 天壇公園 北京発 南昌着 = 江西賓館
4	3/30 (水)	↑	南	(8:15~19:10) 8:35~10:00 10:05~10:35 10:45~13:30 14:30~17:30	滕王閣 八一起義記念館 南昌市人民政府表敬訪問・歓迎昼食会 第三中学校との交流歓迎夕食会
5	3/31 (木)	↓	昌	(8:35~20:30) 8:40~10:10 10:30~10:50 11:00~13:30 14:40~17:30 17:30~	江西省博物館 江西省動物園 市教育委員会表敬訪問、歓迎昼食会 第二中学校との交流 ホームステイ
6	4/1 (金)	↓	上	(7:50~19:30) 8:30~9:30 10:20~10:10 15:10~16:25	体育運動学校見学 八大山人記念館 南昌発 上海着 = 日航龍柏飯店
7	4/2 (土)	↑	海	(9:00~19:35) 9:50~10:50 11:00~11:20 12:40~13:30 13:40~14:00 14:10~17:30	豫園 黄浦公園 博士茶艺館 玉仏寺 上海工業展覽中心
8	4/3	↓		(8:45~) 13:00~18:45	上海発(大阪経由)高松着

使節団の活動状況

3月27日(日)

・高松－北京

正午、空港ロビーで簡単な出発式。緊張と興奮の中で脇市長から激励をうけ、定刻に離陸。トランクは託送していたので大阪までは楽だったが、大阪と上海では通関もあって乗り継ぎには予想外に時間がかかり、慣れていないせいもあってかなり心せかされた。機内食も含めて頻繁な食事。北京は晴れ。予告に反して暖かかった。南昌市人民政府外事弁公室の張知明さん、曾建民さん、中口友好協会の王慶英さん、鄧曉峰さんの出迎えを受けて、ホテルに落ち着いたのは時差1時間の現地時間で10時近かった。



3月28日(月)

・北 京



午前中明の十三陵、午後万里の長城を見学。スモッグで霞んだ山腹に点在する陵は見えなかったが、定陵の大理石づくめの地下宮殿の大きさに先ず感嘆。広大なリング畑を見ながら幅広い郊外のポプラ並木のハイウェイを移動中ずっと中日友好協会の鄧曉峰さんの流暢な日本語の北京事情の熱心な説明を聞く。まだ春が浅い山肌は岩がごつごつと露出して長城は所々修復が進んでいる。登り易い女坂は丁度韓国大統領が来る時刻で通行止めで警護は物々しく、急峻な階段がある男坂を少し登る。見遙かす天に渡る砦の美。往復の市街はラッシュアワーで自転車の洪水だった。サラリーマンたち、三輪車で山ほど空かんを運んでいる貧しそう

な人たち、荷馬車、その間を通称バッタという黄色のタクシーが何台も走っている。スカートの女性は見当たらない、みんなズボンだ。軍人や公安警察官の制服制帽だけは真新しく際立ってあちこちに見えた。すべてが珍しかった。

3月29日(火)

・北 京

中日友好協会を表敬訪問し陸棋秘書長代行と会談。高松市長のメッセージを伝達。前駐在大阪総領事という肩書があって物柔らかな美しい日本語に感心。天安門広場は新婚旅行の中国人カップルから外国人団体にいたるまで世界中の笑顔が充満して平和そのもの。毛沢東の廟の前には入場を待つ長蛇の列があった。噴水の列に挟まれた広い階段を登って、国慶節等の壮大な行事を想像した。そしてその裏手一带にくりひろがる故宮を見学。「王朝永久なれ」の願いをこめた9,999の部屋のほんの幾つかを覗きこむだけで心ははや歴史の中だった。五世紀前の建築とはとても思えぬみごとな保存状況だ。午後は長安道路を通過して天壇公園に行って散策。五穀豊饒を祈る圓丘を前に、旅行中のオーストラリア人とも交流して生徒の顔は晴れやか。4時に空港に着いて搭乗したが、離陸は6時半、南昌市のホテルに落ち着いたのは10時前だった。小雨。



3月30日(水)

・南 昌

この町に滞在中ずっと小雨模様で通りはぬかるんでいた。高松の市文化センターに模型が寄贈展示されている滕王閣をおとずれる。唐三彩の竜とか壁画を見ながら最上階にのぼり、カンカン石に似た音色の偏磐や小太鼓の樂の音にあわせて梁山伯等を演じる美人の踊りにしばし紅樓夢を見る。裏手にひろがる長江の支流の贛江はすっかり霞み、見えるのはのんびりと漕ぎでた小舟二隻のみ。次に訪れた八一起義記念館では革命の足音を直接聞く思いで写真や展示物を見学。続いて人民政府を表敬訪問、劉副市長に盛大な歓迎と激励のことばをいただき、高松市長のメッセージを伝達した。全員が歓迎昼食会に招かれ何度も尊敬の乾杯



をした。午後訪問した第三中学ではずらりとならんで花束をふる生徒たちに迎えられ、挨拶の交換にひき続いて講堂で様々な民族衣装で化粧した少女たちが次々に繰り広げる音楽と踊りの卓越した演技に陶然となる。美少女の名司会に夢見心地でこちらも「若者たち」などの歌や楽器を披露、郭曉明さんに習った「皆友達」を中国語で会場全員で、合唱して締め括った。再び花の波に送られて校長主催の夕食会に向かう。

3月31日（木）

・南昌

江西省博物館では太古から現代に至る陶磁器の6,000年の変遷を分かり易く展示しており、興味深く予想以上に見学に時間をかけた。「自国の文化に中国の若者は興味を持たない」と案内の劉さんはしきりに嘆き、教育については国境を越えて共通の悩みを持つことを確認しあったが、意外に生徒は興味を見せた。



南昌動物園では、無愛想だが本物のパンダをみて写真をとるだけで充分満足した。市教育委員会を表敬訪問。ここでも大仰な歓迎を受けて昼食会に招かれる。第二中学では公式行事が終わると早速ホームステイ受け入れの生徒と同席して、交流開始。前校長等の著名な書道家や画家、印彫家および生徒の制作実演も見学させてもらった。「芸術は世界の言葉」を実感して感激。その後、生徒たちは二人ないし一人ずつホストファミリーのホンダやフォルクスワーゲンに乗り込む。窓から手を振る顔に不安の影はみえない。頼んで夕食会后二三の家庭を訪問。軍人や社長など上流階級の宅で、屋内は狭いがきれいで居心地よさそう。どの家でも賑やかに歓迎されていた。受け入れ希望は非常に多いということである。劉副市長も別の車で視察訪問をしたそうだ。この行事に対する関心の深さに敬意を表する。

4月1日（金）

・南昌－上海

両手一杯にお土産をかかえて送られてきた生徒を集めて直ちに体育運動学校に向かう。ここでは幼稚園から高校ぐらいの年齢の子供たちが英才教育を受けている。設備が充分とは言えない体育館で見学した気迫のこもった規律ある演技はまさに鬼気迫る見事さ。「今度はオリンピックで見られますね」と全員に握手した。次の八大山人記念館は晋時代の道教の寺跡で青雲譜ともいわれ、絵のような田園

の中の大邸宅だった。反骨精神をもった中国文人の風雅な生活を偲びながら独特の書と画の鑑賞に文化の奥深さを改めてかみしめる。木犀が沢山あり潜り戸の側で桃が一本花盛りだった。午後、見渡すかぎりの水田、所々菜の花の黄色でアクセントを付けられた郊外の穀倉地帯を縫う、市のナンバー付の車だけは無料だという有料道路を通過して空港に直行。



つききりで案内説明をしてくれた劉さんに別れを告げて、たまたま韓国訪問の副市長等と同じ飛行機で、上海に着いたのは4時を過ぎていた。

4月2日（土）

・上海

バスの窓から垣間見るだけであったが、上海の町は立錐の余地もないほど人の洪水だった。豫園も国内外からの観光客でごった返してした。一世紀半ばかり昔、明時代の高官が親のために造園したというこの邸宅は、外国租界の中だったからこその文字通り数奇を凝らした設計で、沢山の太湖石の異様さが竜を配した茶館や池や橋と見事に組み合わせたり、凝縮した中国独特の風情を醸していた。黄浦公園の辺りで国際港上海の活気をちょっとだけ嗅ぎとった。午後は博士茶艺館という小さな店で日本の茶道の亜流の中国風の茶をたててもらって暫く休憩の後、禪寺玉仏寺を訪問。スリッパにはきかえて、ビルマから贈られたという白玉製の座像仏の前に進んで俗世の祈りをする。それから尖塔が目を引く外国人向けデパート上海工業展覽中心に行って散策、最後の買物。最後の中華料理を堪能してホテルに帰ったのは8時前だった。こうして中国最後の夜を迎えた。

4月3日（日）

・上海－高松

空港のチェックインカウンターで一週間文字通り行き届いた世話をしてくれた張さん曾さんと別れを惜しむのもそこそこに、出国審査を経て搭乗。のんびりと給油して離陸したのは正午前だった。瞬く間に大阪につく。高松まではやけに小さいプロペラ機。出迎えお礼の挨拶もそこそこに迫る夕闇のなかに生徒たちが消えていくと高松国際空港のロビーはまたひっそりとなった。すべて終わった。が生徒の心の中でこの数日の経験によって、何かの化学変化と醗酵が起りだしたはずである。

5 所 感 集



高松市国際交流協会の中学生中国派遣は今回が3回目で、訪問地や見学地は過去2回と基本的には変更がなかったので、先輩のアドバイスがそのまま役に立ちました。殊に帰国する郭曉明さんが上海まで同行し、北京到着から上海出国するまで張知明さんが親身に面倒を見てくれ、更に北京では日本人以上に日本語が堪能な中日友好協会の王さんや劉さんがずっと付き添って案内してくれるという到れり盡くせりの手配でした。それは只の研修のチャンスではなく、中国と日本とのそして格別高松と南昌との親密な関係の中での公的な行事、つまり使節団でしたから。だから中学生にとっては過大な（それともあれが中国流でしょうか）歓迎を受けました。南昌の中学生の訪高が予定されていますが、同じような“熱烈歓迎”が期待されるのでしょうか。

大阪から上海まで2時間ばかり、一衣帯水の隣国である中国は日本の文化の源流であり、私たちの生活・文化の隅々にまでその影響が浸透している、と口では言っても、現実には最近の歴史とかマスコミ情報によっていくらでも不安になることができます。先ず私たちの日常と比べて余りにもスケールが大きな異郷です。似ていてしかも余りにも違っていても当然です。旧ロシア領事館だったという落ち着いた中日友好協会の庭の桜は殊更に小さく見えました。日本と違って土地がアルカリ性なので発育不全だという説明はうけましたが。

中国五千年の歴史が生み出した文化遺産のスケールの大きさ、深さは筆紙に盡くし難い。教室で学び三国史や映画のラストエンペラ等で知っていたことを、直接目前にして説明を聞くスリル、一足先に訪中した人たちから知らされていた風物や生活の様々の局面（途方もない交通事情、トイレの風情、食事等）を直接垣間見たり体験する愉快、取り残され見失い被害をうけはしまいかと思う異質感、不安—凡そ‘異郷への旅’が起爆するあらゆる心理が増幅され拡大されて参加した中学生に体験されました。

広大で奥深い中国の文字通り僅かな一端との接触から受ける細やかなカルチャショック—これこそ国際交流という名を借りて求めたものですが、それが受身の体験である限り残るものだけしか残らない。いかにして生徒たちに能動的なものにするか、事前研修、日程等を含めて全体的な検討はし続ける必要があります。見せたいものだけを見せられる。しかも巨象の皮膚の一部を手探りしただけの僅かな経験から中国を一般化して先入観とすることだけでは何としてでも避けなければならない。しかし最も確実だったもの、それは人との触れ合いでした。うわべの奥に見え隠れする温もりのある人との出会い、これは生徒たちにとってかけがえのない体験だったに違いありません。この訪中でのハイライトの一つがホームステイだった所以です。中日友好の灯は確実に点火されたと信じます。

敏感な感受性を持った中学生が、選ばれてこの仮初めの訪中で体験したことをどのように醗酵させるか、これがこれからの問題です。

今回の中学生の訪中の行事としての成功を報告して、すべての関係者への感謝の言葉とします。





中学生訪中親善使節団の引率者として中国を訪問する機会を与えられ、外国の訪問としては、これで2度目ですが、今回は、隣国とはいえ、言葉のまったくわからない国への訪問ということで、期待と不安が入り混じっていました。事前研修で基本会話について、特訓を受けて出発しましたが、結局相手の言っていることはわからないままでした。しかし、覚えた中国語をできるだけ使おうと、機会を見つけて話しかけました。「ニーハオ」「再見」「謝々」「很好吃」……ほんのわずかの中国語でしたが、にっこりとはほほ笑み返してくれる中国の人々の表情を見て「理解してもらえたのだなあ」という喜びを味わうとともに、急に親近感が増し、友好関係が深まっていくのを感じました。

訪問の先々での各種の歓迎行事には、旅行の疲れも忘れてしまう程で、心暖まる誠心誠意のもてなしは、まさに「熱烈歓迎」そのもので、言葉の障害を乗り越え、心と心の交流が深まっていったと強く印象に残っています。

学校訪問として、南昌市第二中学校、第三中学校、体育運動学校を訪問いたしました。どの学校でも多勢の児童生徒による大歓迎を受け、歓迎行事として何日も前から準備、練習したと言われる歌やおどり、楽器演奏、そして体育実技等の演技を見せていただきましたが、そこで又驚いたことは、発表に出てくるどの小・中学生とも、自分の演技や発表に自信と誇りを持ち、一片の奥びれた面も見られなかったということです。親善的で友好的な面とともに、積極的に自己を磨き自分に誇りを持って表現しようとする姿は、国際化の時代にあって、私たち日本人も大きく学ばなければならないことであると痛感しました。

南昌市滞在中の2日目、中学生にとって、貴重な体験となる南昌市第二中学校生徒宅へのホームステイの機会を与えられました。私たち引率者も市や学校の方々のお計らいで、何軒かのホームステイの状況を見る機会を与えられました。私たちが訪問した時には、もう家族の一員としてうちとけていました。言葉の通じない中、どうなるのかと思いましたが、家によっては、英語の話せる人を通訳として招待していたり、また食事についても、日本人の好みに合う物を用意するなど、どの家庭も日本からの客に、よい思い出をと、真心をこめた接待がなされていました。どの中学生にとっても、異国の文化や生活習慣に直接触れることができ、真の国際理解につながったものと思います。

この度の7泊8日の訪中は、次代を担う若者にとって、自他のちがいを認め合い、お互いに尊重しあうことを学ぶとともに、広い視野に立って判断し行動することのできる資質を身につける貴重な体験になったことと思います。

すばらしい機会を与えていただいた関係の方々、並びに終始、献身的にお世話いただいた張知明さんにお礼を申し上げたいと思います。



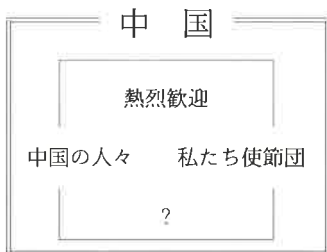


帰国後の所感を述べるにあたり、このような機会を与えて下さった高松市国際交流協会ならびに関係の皆様方に、また、訪中期間中献身的にお世話いただいた張知明さんほか南昌市人民政府の皆様、中日友好協会の皆様、ならびに私たち使節団を熱烈に歓迎して下さった皆様方に、こころより感謝申し上げます。

訪中を終え、第一に感じたことは、『百聞不如一見』という中国の諺が最もあてはまる。不勉強ながら、社会科教師としてある程度は中国の歴史・地理・風景を理解していたつもりではあったが、現実には私の理解が単なる用語の知識でしかないというのがよくわかった。見るもの、見るものが、私の既存のイメージを崩していったように思う。例えば、『万里の長城』は世界の歴史の中で有数の巨大建造物で、全長が日本列島の約2.5倍であることは書物により知っていたが、現実に長城を歩いてみると、「巨大さ」は長さだけではないことに気づいた。尾根を連ねる城壁は、例えひとつの山越えでも、間違いなく巨大で、その「巨大」が次々と続いて、『万里の長城』は「超巨大」と言ってもまだ言葉足らずなほどであった。『天安門広場』しかり、『故宮』しかり、『明の定陵』しかり、『自転車の多さ』しかり、『広大な国土』しかり、・・・イメージと現実のギャップを強く感じ、物事の本質を見つめる心と目を持たなければと、自省するばかりであった。また、中学生という感受性の強いこの時期に、自分の目で実物を見ることのできた生徒たちの幸運と、必ずやこの経験を今後の成長に生かしてくれるであろう確信を感じた。「行ってみんとわからん!」この経験を私も大いに生かしたいと思う。

現在までの中国をつくり上げてきた中国の人々に尊敬の意を表したい。巨大建造物から中国の人々のパワーを感じた。また、バスの中から見ると人々の働く様子からも生きる力を感じた。南昌第三中、南昌第二中、南昌体育運動学校での熱烈な歓迎からも、中国の人々のパワーを感じた。このような中国の熱烈さに対して、私たち使節団・私自身どこまで誠意を示せたのだろうか。満足できるものではなかった。第二はこのように考えさせられた点である。私たち使節団は『友好親善』を目的として訪中した。中国（北京・南昌・上海）を舞台にして、交流し、その目的をある程度は達成できたと思う。生徒たちも身振り、手振り、既得の英語を駆使して、中国の生徒と交流を深める努力をしていた。確かに生徒の間には『友好親善』が芽生えていたと思う。しかし、何かしっくりこないのである。中国の人々は私たちを熱烈に歓迎してくれた。驚嘆するばかりの熱烈さであった。この熱烈さのために、綿密な計画と準備が施されてあったことは十分過ぎるほどうかがえた。確かに私たちは交流の場で努力したのだが、それまでの準備段階でどれだけ努力できたのだろうか。私自身は十分でなかったというのが正直なところである。例えば、中国の人々

は私たちを迎えるために、一生懸命、片言でも日本語を話せるように努力していたのに、私はその努力を怠っていた。この努力が十分なされていれば、さらに深い交流が図られ、『友好親善』の目的も今回以上に達成できたのではないかと自責の念にかられるのである。過ぎ去ったことで、今からやり直すことは不可能に近いが、自省の行動として帰国後NHKテレビの中国語講座を視聴している。再度、中国を訪れる時には今度は中国の人々の熱烈歓迎に報いたい。





長い歴史と広大な大地を持つ中国、日本文化の源流である中国。年度末の多忙な時期、親善使節団という重責にもかかわらず、この中国を、生徒たちと大いに堪能することができた。見るもの、聞くもの、食べるものに驚きと感動の八日間であった。それにしても、日本と一衣帯水の地にある中国は、とてもすばらしかった。

初日、中日友好協会の鄧さんの流暢な日本語の説明で明の十三陵、万里の長城の見学をする。人類史上最大の建造物は、今もなお雄大な姿を残し筆舌に尽くしがたいものがあった。この一日で団員同士は、親睦を深めたようである。

翌日は、車も人も自転車もあふれんばかりの道路を中日友好協会へ向かう。次に、中国のシンボルともいえる天安門広場へと足を運んだ。天安門には、今もなお中国を見守るかのように毛沢東の遺影が掲げられていた。さらに、故宮、天壇公園を見る。スケールの大きさには、本当に目を見はるものがあった。もう一度この地にという思いを残し南昌へ向かう。

南昌市は、あいにくの小雨であったが、訪問校はどこも文字通りの熱烈歓迎であった。その歓迎ぶりに胸が熱くなった。また一方では、場違いな所に来てしまったような恥ずかしさも覚えた。交流の場では、多種多様な芸に魅了させられ、彼らの堂々としたすばらしい演技に私たちは惜しみない拍手を送った。

ところで昨年に引き続いてのホームステイであるが、生徒たちは中国の生活や習慣を実際に経験できるという期待と、言葉が通じないという不安を抱きながらホストファミリーの家へ。しかし、一夜明けて両手いっぱいのおみやげを抱え私たちの元に帰って来た生徒たちは、満面に笑みを浮かべていた。慣れない日本語で一生懸命話しかけてくださったこと、精一杯の持て成しを受けたことなど…。バスの中では、互いのホストファミリーを自慢していた。生徒たちにとって生涯忘れられない一夜であったと思う。

一方、好奇心旺盛な私は、訪問校で日本の保健室に当たる「校医室」を訪れ交流を深めた。お世辞にも衛生的とは言えない狭い部屋で校医（ドクター）は、暖かく迎えてくださった。木製のベットにはござが敷かれているだけであったが、学校によっては治療器などもあり、ご年輩の先生方に喜ばれているということであった。

何かにつけて、今の日本とは格段の差がある中国。しかし、国家のために働き、独学で他国の言葉や文化を学ぼうとする向学心に燃えた姿に、今の私たちの生活を見直さなければと思った。期待と緊張の中での親善訪問。健康に天候にそして、人に恵まれ多くの思い出と共に無事終えることができた。言葉や習慣こそ違おうが国境を越えた友情の輪が広がったことだろう。そして、青春真っただ中の生徒にとってこの貴重な経験が将来において生かされることを期待したいと思う。また井の中の蛙であった私にとっても。

最後に、このような貴重な機会と与えてくださった国際交流協会の方々をはじめ、中国でお世話になった方々、常に笑顔で献身的にお世話してくださった張知明さんには心から感謝を申し上げたい。

ありがとうございました。





晴れ渡る空に飛び立った瞬間、私は中国へのきらびやかな夢に、一步近づきました。私達、高松市中学生訪中親善使節団員は、3月27日、中国に対する真剣な眼差しと、率直な心を胸に抱いて、広大な中国、五千年の歴史を持つ中国に親善訪問し、感動や興奮、そして喜びを分かち合う事ができました。今までは、教科書やテレビの中だけでしか存在しなかった、中国の歴史の流れ。北方騎馬民族の侵入を防ぐために築かれたという万里の



万里の長城にて

長城は、自分の考えていた物とのスケールの大きさの違いに感激するばかり、憧れを抱き、尊敬していた中国の歴史を、万里の長城から眺める景色から感嘆の声と同時に、学ぶ事ができたように思います。また、「ラストエンペラー」の即位式で知られる故宮。身近に存在する物全部が、古代の歴史として感じられ、面積約72万㎡という広大な広さに関心する一方、中国のシンボルとも言われる天安門広場など興味深い場所を次々と訪問しました。

南昌市に到着した際、バスから眺める風景は、本当に殆んどと言って良い程、闇のベールに覆われ、残念な気持ちでいっぱい。しかし、そう思うのは早かったのです。眠りに就いた私に、朝が来たのは午後五時。窓の外で物音が騒がしく、私の頭には、不思議に思う心が過ったのです。勢いに任せて窓を開け、好奇心一杯に、さざめく都市を見つめました。

『もう、街は動いている…』その一時の間、新たなる考えが突進して来たかのように、自分の下に繰り広げられる、賑わう街並みの光景が、目に焼き付くかのように、ただ私はずっと、そこに立ち尽くしてしまったのです。人々は動き、自転車や自動車が、まるでラッシュの時刻のように…。また周辺には、高層ビルが立ち並び、中国は日本より遅れた国とイメージしていたが、それも一挙に解消したのです。また、南昌第二、第三中学校を訪れ、どこへ行っても私達は“熱烈歓迎”され、本当に心温まる歓迎に驚き、そして忘れません。最も忘れられない出来事と言えば、この旅行のメインというべき、ホームステイ。自分の念願が叶う、そんな気持ちが、心から離れなかったし、国際交流に少しでも協力するため、中国語や英語、またジェスチャーで。その他、歌を披露したり、中国舞踊を教わったりと、みんな言葉は通じない異国の人が、やはり、交流という物は『心』が大切だと思うのです。心から話をし、心から笑って…。私達に演技する時も、一生懸命な表情で語りかけてくれたり、囁くように話してくれたのです。心で通じ合える喜び、素晴らしさ、そして生き方を、今回の親善訪問を通して学ぶ事ができました。

日本に帰国して、もう何週間も過ぎようとしています。私の心の中では、まだまだ親善訪問への夢は繰り広げられているのかもしれませんが、今にでも、みんなの笑顔や、笑い声が聞こえてきそうです…。国境を越えて、結んだ心と心は、友達以上の繋がりを築いたように思います。まだまだ国際交流に対して、十分な絆を結べてないかもしれませんが、これからの中日友好への希望と発展の第一歩として見做してほしいと思う。

今回の事を通して、この広い世界の中で、団長先生を始め、先生方、団員十九名の皆様と、こうして巡り会えた事を感謝しています。この親善訪問が、一人一人の遙かなる夢へと導かれる事をお祈りいたします。

再見、



僕はこの中学生訪中親善使節団の団員に選ばれたことに感謝しています。それは、夢にまで見た幻のような中国に足を踏み下ろし、国境をこえた交流ができたからです。

まず北京では明の十三陵、万里の長城、天安門広場などを見学しました。明の十三陵は地下宮殿になっていて中は巨大な皇室が左右対称に作られていました。万里の長城と天安門広場では、その広さに声が出ないくらい驚きました。万里の長城は日本列島の約二倍の長さを持ち、天安門広場は四十四ヘクタールすべてレンガ造りという想像もできない光景を目にしたからです。

三日目、首都北京を後にして今回の旅の第一目的である南昌市との交流へ移りました。南昌市では、人民政府や滕王閣や体育運動学校などたくさん訪問しましたが、やはり印象深く心に残っているのは南昌市第三中学校で国境をこえて友達を作れたということと、南昌市第二中学校の生徒宅にホームステイできたことです。

僕達は期待に胸をふくらませながら、南昌市第三中学校の門をくぐりました。その瞬間、僕たちの目は驚きと感激で光り輝きました。なぜならば、今までに見たこともないような熱烈な歓迎を受けたからです。だから僕達はすぐ南昌市第三中学校の生徒たちと仲よくなり友達になれました。とても短い時間だったけれど、昔からの親友のような気がしました。いつの日か大きな舞台の上で、彼らと再会できることを祈りながら別れを告げました。

翌日、期待と不安でドキドキしながら、南昌市第二中学校へ行きました。ここでも熱い歓迎を受けました。そのあと団員はバラバラになってホームステイ先の家へと向いました。最初は言葉が通じなくて嫌になったけれど、一時間もしないうちにみんなと仲良くなれました。この時、僕は言葉の壁の大きさと同時にそれをも乗り越える、交流のすばらしさを強く実感しました。一番不安だったホームステイだけど終わってみれば自分の人生の中で掛け替えのないすばらしい思い出として残すことができました。最後は、文通することを約束し、またいつか会えることを願いながら笑顔で別れました。

七日目からは上海の見学です。行く所すべてに中国ならではの雰囲気味が味わえました。なぜならば、商店に入ると、掛け軸がたくさんならんでいるし、飲食店に入ると、豪華な中華料理がたくさんでてくるからです。上海でもとてもいい思い出がたくさんできました。

長いようで短かった一週間ですが大変充実していたように思います。十九人の友達、四名の先生方、中国でお世話になった方々などたくさんの人々に巡り会えて良かったと思います。最後に、出会ったみなさんや陰で支えて下さったみなさんに感謝したいと思います。ありがとうございました。



南昌での夕食風景



3月27日、朝。いつもなら目覚まし時計を止めて、また寝てしまうような僕が、珍しく目覚まし時計が鳴ると同時に起きた。カーテンを開けて外を見る。素晴らしい青空が目に入った。僕が出かける時、いつもならどしゃ降りの雨に見舞われるか、風が吹き荒れるのに、今日はいったいどうしたことだろうなどと思った。制服に着替える。車に乗る。空港に着く。さあ、素晴らしい旅の始まりだ。

1日目。この日は初めての海外、中国に到着した記念すべき日だ。飛行機を乗り継ぎ、最初の目的地、北京に到着する。機内から下を見ても、真っ暗で何も見えなかった。はっきり言って、中国上空を飛んでいる気がしなかった。しかし、北京空港に着いてみると、そこはやはり中国だった。広い、広い、広い…。滑走路の端が見えなかった。その時、友達と話したものだ。「土地を無駄遣いしやがって、！」

2日目、3日目は北京見学だった。いくつかの場所を見学したが、あまりよく覚えていない。何をしたかある程度覚えているのは万里の長城だ。話で聞いたとおり、本当に大きかった。少しの時間だったけれど、長城を歩いた。自分がここに立っていることが信じられなかった。この時の感想は次のとおりである。『すごく大きくて坂も急だった。これなら敵にもおそわれないだろう。』（旅行の記録より）これをホテルで友達に見られ、笑われた（他のでも笑われたが）。でも別にかまわない。これがその時の純粋な気持ちなのだから。

4日目、5日目、6日目は南昌での生活だった。3日間の中で1番心に残っているのは、やはりホームステイだ。行く前は友達といっしょに「行きとくない」やら「めんどくさい」なんて言っていたが、いざ行ってみると「いきとくない」なんてことがあるものか。大人の人は言葉が通じず、子供と英語が通じるだけというシビアな環境のもとでも、ちゃんと話は通じたし、食事はうまかったし、何よりも楽しかった。早いうちに手紙を送りたいと思っている。しかし、達筆すぎて字が読めない。どうしよう…。

7日目は上海での行動だった。特にというような見学はしていないが、中国で過ごした8日間の中で、1番楽しかったかもしれない。たくさん買い物もしたし、ホテルの部屋で友達とさわいで遊びまわったりもした。ついでに先生に怒られてしまった。

8日目、ついに帰国の日だ。「もうちょっとここにおりたいのう。」と友達と話した。本当に帰りたくなかった。できれば、このメンバーで、あと3日か4日ぐらいは中国にいたかった。でも、それはかなわぬ願い。日本の土を踏む時が刻一刻と近づいていた。大阪行きの飛行機に乗る。大阪の土を踏む。久しぶりの日本の空気を吸う。そして高松へ。高松空港に着く。出迎えの方々の拍手をいただきながらロビーに並んだ。到着式が終わった。僕は大きなため息をついた。いったい何のため息だったのだろう。

最後に僕達の御世話を下さった先生方、張さん、その他の方々、本当にありがとうございました。



南昌第三中学校にて



「帰りたくないな。」中国に別れを告げる時、私はこう思いました。けど行く時は、「めんどうくさい。こんなんやってられんわ。」などと、行くことに対してとても嫌みを言っていました。後から考えると、この心境の変化には自分でも驚いています。

ところで、この中国で驚いたことといえば、どれもスケールがでかいことです。国土は広いし、人口も多いし、料理の品数まで多いしで。その品数の多い料理の中で妙なものを出されたことがありました。その料理とは蛇です。丸一匹の蛇が輪切りにされて皿にもられていました。これにはさすがの私も箸をつけられませんでした。その他に驚いたことといえば、万里の長城の長さです。「あっ、なんか壁みたいなんがある。」と言い出していました。「やっぱり万里やなあ。」と、一人で納得してしまいました。

その他に私が見たものには、中国五千年の歴史を誇る建造物などがあります。その建て物のほとんどは赤色で塗られていました。屋根は青色や黄色のものが多かったと思います。けど、どれも原色ばかりで、赤・青・黄・緑を主に使っていたと思います。日本みたいに「木」そのものの色を使っているところはなかったようにも思います。

ところで、私の中国訪問中の課題は「中国の教育について学ぶ」でした。私は今、教育について大変興味を持っています。だからこの機会を参考に、日本と中国との教育での違いを見付けて来ようと思いました。が、あまりはっきりとした違いはありませんでした。違いといえば、中一から高三まで同じ学校にいました。（南昌市で聞いた話）私が本当に知りたかったことは、「先生の教え方はどうなのか？」ということでしたが、これも分かりませんでした。

この中国訪問の旅は、自分でも実り多い旅になったと思っています。それは、中国でも有名な滕王閣や八一起義記念館を見ることもできたし、沢山お土産を買うこともできたし。何よりも中国で友達が十人もできたからです。

最後になりましたが、このような貴重な体験をさせてくれた方々にお礼が言えなかったので、この場を借りて言いたいと思います。

「この八日間お世話をしていただき、ありがとうございました。」

そして、こんな私と仲良くしてくれた十九人の仲間にも、この場を借りてお礼を言いたいと思います。

「楽しい八日間をどうもありがとう。また必ず会おうね。」



南昌での夕食会にて



中国。それは国土が広く、人口の多い国としか思っていなかった僕は、出発前から甘い考えでいました。「言葉は英語が通じるだろう」こう考えた僕は、北京に着くまで中国語というものを何一つ勉強しませんでした。27日の夜、北京に到着。バスでホテルまで行ったのですが、道路は40km以上も一直線で周りは、並木に囲まれていました。「とてつもなく中国は広いなあ。」と感嘆しました。

異国のホテル。早速、風呂をつまらしてしまい、笑い転げました。

北京では、やはり万里の長城と天安門広場に感動させられました。山頂近くに築かれている六千kmもの長城は、見渡す限り延々と続いていました。こんなものを昔々の人々が築いたとは。昔の人は化物か、と思わされました。天安門広場は、さすが中国の広場、どこからどこまでが広場なのか分からないくらい広がったです。この広さには、本当に驚かされました。

「さあ、次は南昌だ。」南昌は、高松と友好都市なので、空港で大歓迎されるなあと、ひそかに期待していましたが、もう夜でしかも雨だったので、歓迎はありませんでした。けれど、高松と気候が似ていたせいか、すがすがしい気分になり、感じもよかったです。

南昌での思い出は、何といってもホームステイでしょう。ホームステイは、一人きりで不安でしたが、ホームステイ先の趙飛さんがとてもやさしい人で、ぼくの変な英語も通じたので、楽しく過ごせました。両親の方も笑顔で接してくれて、食事のときも本場の中華料理をその笑顔で勧めてくれ、つつい食べ過ぎてしまいました。趙飛さんとは「三国志」の話で盛り上がり、紙等を書いて分かりあうこともありました。大きな思い出として心に残り、中国に新しい家族ができたように思いました。別れがとてつらく、趙飛さんの悲しそうな笑顔が、深く心に染み入りました。「別れ」の深い意味を知ることができたと思います。

「よしっ、上海だ。」なぜぼくの心がこんなに高ぶっていたかということ、三時間ぐらい、お土産を買う時間があつたからです。最後の買い物だったので、はりきっていましたが、だんだん荷物が重くなってきたので疲れました。安く値切れるというところがよいなあと思いました。

以上がぼくの部分的な中国での感想です。

ほかに、出発前に楽しみにしていた本場の中華料理のことですが、本当に日本と味つけが違って、不思議な味もありましたが、ほとんど口にありました。中には、とんでもないものもありましたが…。

中国という国は、見てみなくては分からないような熱気にあふれていて、人々も熱い暖かな心を持っているように思いました。ぼくたちが歩いていると、見知らぬ人でもジロジロとぼくたちを見て、名札を読んで話しかけてきます。笑顔で話しかけてくるので悪い気はしませんが、とてもあせりました。

このような感じの中国訪問でしたが、僕にとって大変意味深いすばらしいものだったと思っています。広大な中国のほんの一部しか見られてはいませんが、そのほんの一部だけでもすばらしいものがある中国に、驚かされるとともに、より一層、興味を持ちました。

最後に、中国訪問を必死に薦めてくれた先生方、中国でお世話になった団長先生や諸先生方、そして張さん、本当にありがとうございました。またいつの日か戻るであろう中国に、少しの間だけ——再来。



すばらしき仲間たち



3月27日北京空港に着きました。あまり寒くなくてほどよい気温でした。次の朝バスに乗って北京の視察見学をしました。観光地にむかうとちゅう、黄色い車が多くはしっていました。その車は、中国のタクシーでした。値段もてごろで、ほそい道などとおるとき便利だそうです。そのほか中国では、自転車の多い事におどろきました。車道まではしっていて車のクラクションがひびいていた事は、なぜか心に残っています。

3月30日南昌市の南昌第三中学校の崔暁如君と交流をしました。ちょっとした中国語や英語で話したりジェスチャーなどで崔君とは、楽しい一時がくれました。

3月31日南昌市第二中学校を訪問しました。その中学校の生徒で尚天天君という人の家にホームステイをしました。日本とはちがっていてふとんの上に毛布があったりと、日本と中国ではちがう所がありました。

学校訪問で1番印象に残ったのは南昌市体育運動学校を訪問したときです。幼児から高校生まで中国の武道やおどりなどを見せてくれました。その学校からゴールドメダリストが誕生すると思います。みんなオリンピックを夢みて頑張っているんだなあとおつくづく思うとともにぼくも入試に向けて頑張らなくてはという気力がわいてきました。学校訪問、南昌市人民政府の表敬訪問、ホームステイなどをしたりして自分なりに日中の友好親善が深まったと思います。



万里の長城にて

中国に行って南昌の学校での交流や明の十三陵、万里の長城、中華人民共和国のシンボルともいえる天安門、南昌一の観光名所滕王閣などをじっさいに見て、中国の文化の奥深さが建て物などから分かってきました。

その上、いっしょに行っていた団員の人達とも8日間という短い時間の中で楽しい思い出ができました。

中学生訪中親善使節団の一員になった事で中国の様子などが分かりぼくにとって貴重な体験となりました。

このような機会をあたえてくださった先生方や国際交流協会のみなさま、本当にありがとうございました。謝謝。

最後に一言。第3回中学生訪中親善使節団団員のみなさんまた会える日を楽しみにしています。



「中国どうだった？」

帰ってきてから、何度聞かれたのだろう。その度に、

「すごかった。」

としか言えない自分に、はがゆい気持ちでいっぱい、心の中では8日間の思い出が、うずうずとしている。

出発前。私は、不安でいっぱいだった。念願の中国に行けてうれしいはずなのに、心の中では、(友達ができるだろうか)や(言葉は通じるだろうか)などという思いでいっぱいだった。

あっという間におわってしまった8日間。一日一日が本当に充実していて、順番の付け様がないけれど、その中でも一番しっかりと私の心に焼きついているのは、ホームステイだろう。実を言うと私は今回の中国訪問の中でホームステイが一番不安だった。初めての異国で、それも今日会ったばかりの人の家に泊まるのだから。しかし、実際はそんな心配などする必要もなかった。



ホームステイ先で

鄧慧菁家に行くトリピングに通された。日本とは違う電気にびっくりしている間もなく、彼女の家族の紹介を受けたり、家を案内してもらった。中国の家はせまいと聞いていたが、日本の家とさほど変わらない。よほど彼女の家は金持ちなのだろう。と、思っていると、彼女のお父さんは警察官だった。再びびっくりしている私に、お父さんが、りんごをむいてくれたり、お母さんが笑顔で話しかけてくれた。お父さんとお母さんは、日本語も英語も分からないはずなのに、とて

も熱心に話しかけてくれ、やさしく接してくれた。それから、友達に来て紙風船でバレーをした。最初は、私の言っているルールがうまく伝わらなかったけど、何度もジェスチャーや絵で説明していくうちに分かってくれた。その時のうれしさは言葉では言い表せられない。今思うと中国語は、両手で足りるぐらいしか知らない。英語だってあやふやな私の言葉が伝わったのが不思議でたまらない。その時は、私なりに必死だったと思う。かばんに何気なく入れておいた和英辞典がこんなにも役立つとは思わなかった。辞書を引いては紙に書き彼女に見せる。彼女も辞書を引いて書いてくれる。それを辞書を引いて書く。と、いった事のくり返しだった。傍から見ると大変そうかもしれないが、その時の私には、全然苦にならなかった。

中国に行って思った事。それは人の心が暖かいという事。見ず知らずの日本人に優しく接してくれ、いつも笑顔でいてくれる。不安をいただいた私にとって何よりもまさるうれしいものだった。

最後に今回、中国訪問という素晴らしい体験をさせていただいた先生方、国際交流協会の皆様に心から感謝したい。本当にありがとうございました。

高松市立協和中学校 小 河 亜紀子

さまざまな人達との出会い、交流そして別れー。これが8日間中国へ行き私の心に深く印象づけられていることです。

中国は昔から憧れの国で、ぜひ一度行ってみたい国でした。だから今回の訪中団員に選ばれた時は天にもものぼる気持ちでした。行く前日までは不安と緊張で胸がいっぱいでしたが、実際に行ってみると毎日がとても新鮮で新しい発見ばかりでした。

北京では万里の長城を初め、天安門広場や故宮などを見学しました。教科書の中だけではなく、生の歴史に触れることができ、そのスケールの大きさに圧倒されるばかりでした。

北京、南昌、上海と見学した中でもやはり高松市と友好都市である南昌市が印象的でした。第三中学校、体育運動学校との交流会、そして、今回の旅行のメインである第二中学校の生徒の家へのホームステイ。

私が一番楽しみにしていたのがホームステイです。

私は神納さんと一緒に鄒慧菁さんの家にホームステイしました。鄒慧菁さんは2つ年上の人で、お父さんもお母さんも、言葉こそ通じませんが笑顔で迎えてくれ、とても感激しました。

夜になると、鄒慧菁さんの友達が来てくれ一緒に踊ったり歌ったり……。私と神納さんで「さくらさくら」を踊るととても喜んでくれました。他にもいろいろと

日本の演歌を中国語で歌ってくれたり、キーボードで演奏してくれたり、そのお返しに折り紙を教えてあげたり、紙風船でゲームをしたり……。楽しくて、時がたつのを忘れていました。

私のごこない英語、中国語を鄒慧菁さんは理解してくれました。しかし、言葉での会話よりも、お互いの心と心の会話がはずんだように思います。

次の日の朝、バスの窓から何度も「再見」といいながらお別れしました。その日の話題は、一日中ホームステイの話でもちきりでした。

たった一晩という短い時間でしたが、国境を越えて友情を深め合うことができたと思います。「言葉、習慣、風俗は違っても心と心は通じ合う。」というようなことをよく聞きますが、私自身実際に体験するまで信じることができませんでした。

目に見えないおみやげをたくさんもらったような気がします。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった団長先生をはじめ、諸先生方、国際交流協会の方々、また、ずっと私達のお世話を献身的にしてくださった張さんにお礼を申し上げます。

どうもありがとうございました。謝謝。



ホームステイにて
鄒慧菁さんとお父さん



『中国』この国は、私が初めて日本を飛び出し、降り立った地でした。

北京に到着したその夜、辺りは真っ暗で、ホテルまでのバスの中から見えるものといえば、長く続くポプラ並木ぐらいでした。ところが、翌朝私がホテルの窓の外に見たものは、山のない広大な土地でした。そこに見える何もかもが、狭い日本で暮らしていた私にとって、新鮮なものでした。そしてその時初めて、中国へ来たんだ、という実感が湧きました。

北京での見学地で、私の心に一番残ったのは、万里の長城でした。写真やテレビの中のものとは、全然スケールがちがいます。私はバスの中で、とても興奮しました。そして、よく昔の機械もなかったころに、こんなに大きなものがよく造れたなとも思いました。

広大な国土や建物の大きさにも驚かされるばかりでしたが、一番驚いたのは、中国のどこへ行っても『熱烈歓迎』で私たちを、迎えてくれたことです。特に南昌市の学校訪問では、どの学校も私たちのために、中国の踊りや歌を見せてくれたり聞かせてくれたりしました。

私が一番不安だったホームステイのある南昌市第二中学校では、緊張していた私を、笑顔で張晶さんが迎えてくれました。

張さんのお宅へおじゃますると、お父さんとお母さんとお姉さんが迎えてくれました。初めは緊張して何も話せませんでした。みんなの笑顔を見ているうちに、自然にいろいろな会話ができました。持って行った折り紙で鶴を折ってあげたり、さくらさくらを歌ってあげると、とても喜んでくれました。

その日の夜、私と弾正原さんとで、日本語を教えてあげました。熱心に聞いてくれ、メモする張さんを見て、「年はそれほど変わらないのに、すごいな。」と思いました。そして、私も見倣わなければならないとも思いました。ホームステイ先で気になったのは、言葉の壁でした。しかし、言葉が全然通じなくても、苦にはなりません。逆に一生懸命に相手に伝えようとする気持ちが通じて、よく分かってもらえました。疲れていたのか、夜はぐっすりと眠れました。翌朝には、張さん家族と寂しいけれどお別れしなければなりません。私は、張さんのお宅へおじゃまして、形ではないお土産をたくさんいただきました。張さんをはじめ、張さんのご家族、お友達のみなさまありがとうございました。

さて、私はこの旅で八日間ずっとお世話をして下さった、張知明さんとお話し、張さんのお仕事のすばらしさを知りました。そして私も将来、張さんのように国と国との架け橋となる仕事に就きたいという、自分の目標を持つこともできました。そういう仕事に就くには、それ相応の努力が必要だと思いますが、私はこれからこの目標を達成するために、努力をしたいと思います。

この七泊八日の短かった旅は、私の視野を広げてくれ、心の大切さを教えてくれ、とてもたくさんの友達を作ることでもできました。私がこの旅で得たものは、言葉では表せないほど、大きいものだったと思っています。中国を飛び立つ時は、もっと長い間ここ（中国）にいたいと思いました。また機会があればもう一度、あのすばらしい国『中国』へ行きたいです。

最後になりましたが、このような貴重な体験をさせてくださった市長さん、国際交流協会の方々、中国の張知明さんをはじめとするお世話をしてくれた方々、八日間私たちを見守って下さった先生方、団員のみなさま、そして陰で私たちを支えてくださった多くのみなさま、本当にありがとうございました。

この良き思い出は一生忘れません。



張知明さんと友達と



何千年も昔から続いてきた中国と日本の国交。日本の文化の原点を感じさせるようなものが、中国にはあったような気がします。生まれて初めての海外旅行で、七泊八日という短い期間だったけれど、学校では学べない何かを得ることができたと思います。

高松を出発してから、8時間。初めて踏んだ異国の土は、とてもあたたかいように感じました。たくさんの人々が行きかい、馬車や自動車が走る。毎日が、感動と興奮でいっぱいでした。

北京の明の十三陵を始めとした、遺跡や建築物の見学。どれもこれもがすばらしくて、雄大でした。万里の長城では、登っても登っても頂上にたどりつけなくて、これを作った人々は、とても苦勞しただろうと、一人で変に納得したりもしました。



ホームステイ先で

しかし、何よりも、この旅の一番の思い出がホームステイでした。私を受け入れてくれたのは、周桓さん一家でした。周桓さんは、お風呂や、ベッドの心配までしてくれる。細かいところにまで気付く、とても優しい人でした。周さんの家族もとても親切で、朝、起きると髪をとかしてくれました。

ホームステイの日、私たちは周桓さんにつれられて、山下君のホームステイ先へ行きました。たくさんの方々が来ていて、私たちは卓球をしたり、ピアノをひいたりして、とても楽しい時間を過ごしました。言葉は違うけれども、みんないっしょけんめい話してくれて、私もカタコトの英語で答えるうちに、いつのまにか肩をたたき合って笑っていました。まるで以前から、友達だったかのように、気持ちがすごく充実していました。広い国土に生きる人たちの文化、言葉、そして生活習慣に直接ふれることができました。日本のように、小さなことにいつまでもこだわることなく、まっすぐに、ひたむきに生きていく人々の強さや、心の豊かさに感動しました。

中国といえば、近くても、心が通わない国とっていました。しかし、この訪中によって考えが一変し、おまけにたくさんの方々ができたことを、大変うれしく思います。出発から8日間、私は一生かかっても作れないような思い出を手に入れることができました。

この旅行で知り合った、19人の仲間は、とても素晴らしい人達ばかりでした。そして、先生方、張さん、曾さん、すべての人たちに感謝しなければなりません。そして、その気持ちを忘れることなく、これからの日中友好に、尽くしていきたいです。

本当にありがとうございました。



五千年の歴史に彩られた中国の広大さに比べると、今度の私達の旅は豆粒ほどの小さなものにすぎませんが、初めて海外に出る私にとっては大冒険、初めから終わりまで、ワクワク、ドキドキの連続でした。

三月二十七日午後一時、大勢の方に見送られて高松空港を出発し、大阪、上海を経由して北京に到着したのは午後十時頃でした。その夜は長い飛行の疲れのためか、ぐっすり眠りました。

二十八、九日は北京見学。日本では見たことがないような見渡すかぎりまっすぐ延びている長い長い並木道、その向こうには果てしなく広がる大地……。ここでは時間さえゆっくり流れているように思えました。

最初の見学地は明の十三陵の一つである定陵。長い階段を降りてやっとたどり着いた地下宮殿は、ひんやりと冷たい空気が頬を打ち古墳とは一味違った雰囲気でした。左右対称の構造で、五メートルを超える高い円形の天井まで大理石で造られていました。その大きく、重そうな石をどのようにして積み上げたのか不思議でたまりませんでした。

次は待望の万里の長城八達嶺の見学。教科書の写真で見たことのあるそれが、バスの窓から見えてきた時、「中国に来た」という実感に包まれました。何千年という気の遠くなるような長い年月。何千億人もの眼に触れ、踏まれ、傷つけられてきたこの地上最長、最大の建築物の上に、自分の足で立ち、その壁面を手でなでた感触は、とても言葉では表現できません。

三月二十九日午後六時、次の訪問地南昌市着。ここは、高松市の姉妹都市で人口三百八十万、江西省の都です。

翌日、南昌市第三中学校での交流会では、主として同じ年齢の車さんと話しました。上手とはいええない私の英語を懸命に理解しようと努力する姿勢が好ましく、お互いの気持ちが通じたときは、喜びで胸が熱くなりました。そして、もっと英語を勉強しておくべきだったと後悔した点もありました。

三十一日の夜は南昌市第二中学校生徒宅でのホームステイ。学校での交流会の後、下校する邦さんと連れだってお宅に伺いました。邦さんお宅は、両親との三人暮らしで、お父さんは教育者らしく、初めてのリコーダーをととても上手に演奏してくれました。その日の夕食は私の大好物の餃子。早速その餃子の皮作りから手伝いました。楽しい夕食の後、日本の折り紙、リコーダーの演奏、カラオケなどでコミュニケーションを図りました。英語、筆談、ジェスチャーを交えての会話でしたが、意味が通じたときは、パッと灯がともったように、家中に明るい笑い声が広がりました。私達の数少ない中国語が通じたときはまた格別で、特に、英語が話せなかったお母さんは喜んでくれ、拍手までしてくれて、胸が熱くなるほどでした。翌朝、お別れのときには、荷物をもってくれたり、紙袋をくれたり行きとどいた親切さに涙が出そうになり、ここに来てよかったなぁと心の底から感じました。

七泊八日という短い期間でしたが、中国の広大さと共に、そこに住む人々の心の温かさが感じられた素晴らしい旅となりました。

このような素晴らしい機会を与えて下さった関係者の皆様、いつも笑顔で最後まで案内して下さいました張さん。本当に有難うございました。心からお礼を申し上げます。謝々。



天壇公園にて



「広大な中国でくり広げられる超スペクタクルギャグドラマ」この旅を一言で表現すればこんな感じだろう。毎日が、感動、ハプニング、失敗の連続で、笑いのたえなかった8日間、楽しく、心に残り、そして収穫の多い旅だった。

初日、大役の生徒代表あいさつを無事終え安心した僕。次に待ち受けていたのは「酔い」だった。生まれて初めて乗った飛行機（ANK468 便）は、最高に揺れた。そして大阪空港での人の波。（これから8日間も大丈夫だろうか。もう家に帰りたい。）と情けないことに早くもホームシックにかかってしまった僕。重い荷物と、税関を待つ長蛇の列にヘトヘトになりながら、なんとか飛行機に乗り込み、やっと北京に着いたのは夜だった。宿泊したホテル「新万寿賓館」はすごい高級ホテルでビックリした。

二日目、三日目は北京を観光した。中でも最も感動したのは万里の長城だ。写真やテレビで見たことはあったが、実物はもっとすごい。あまりのスケールの大きさにただ嘖然とするばかりだった。その他天安門広場、故宮など、どれもこれも（やっぱり中国はすごい。来てよかった。）と心から思わせるすばらしい所だった。そして感動の余韻を残したまま、僕たちは南昌へ向かった。

「観光の北京」「交流の南昌」「買物の上海」の示すとおり（自分で勝手に考えたのだが）南昌での主な目的は交流だ。最初に訪問した南昌第三中学では、すごい熱烈歓迎にビックリした。門をくぐったとたん大きな歓声と拍手がわきおこり、なんとも言えない気分になった。その後2人組になって英語で会話をしたり、ダンス、歌、芸などの交流会に参加し、楽しく過ごした。



張さんと

翌日は、今度の旅でもっとも不安だった南昌第二中学校生徒宅へのホームステイがあった。しかしそんな不安もホームステイ先の匂丁君、そして彼の両親のやさしい笑顔を見ると、いっぺんに消えていった。家についてからは、いっしょに卓球をしたり花火をしたりして遊んだ。また僕のためにすばらしい部屋も用意してくれていて、何不自由なくホームステイすることが

できた。これも匂丁君とその両親のあたたかく、やさしい配慮のおかげだ。本当にうれしかった。

別れる時、匂丁君がぼくに彼の懐中時計をくれた。その時計を見るたびに彼の笑顔を思い出す。たった一日のつき合いだったが、彼はぼくの親友だ。それがこのホームステイの何よりの収穫だ。

その後上海で二泊し帰国。あれから半月が過ぎようとしている今、目を閉じると20名のすばらしい仲間、蓮井団長初め先生方、そしてお世話になった人達の顔が浮かんでくる。本当にありがとう。そして僕はこれからこの旅で学んだことを生かして、これからいろいろがんばっていくと思う。

～出発一週間前～

「痛～い」

私は、とんだハプニングに巻き込まれたのだ。それは、大きなドアに指をつめてしまったのだ。骨は幸い折れなかったものの、右手薬指が真っ青。深く切り血がダラダラの状態になったしまった。なんと、全治十日。この状態で中国に行けるのかどうか不安であった。

～いよいよ出発・そして到着～

心配していた手もほとんど治り出発の日を迎えました。研修会では緊張して何も話せなかったみんなと空港でやっと話せるようになり、機内では、ピーチク・パーチク話しすぎて周りの人たちにご迷惑をおかけしたと思います。すみませんでした。

そして私たちは張さんたちの笑顔に迎えられ無事中国に到着しました。しかし、空港では中国語があらこちらで飛びかかっていて、私の頭の中はパニックでした。

～豪華ホテル&食事・豪華なトイレ?～

まず初めに泊まったのは北京の新万寿賓館で、とても豪華だったので感激しました。そして食事では、辛いものばかり出るのかと思っていましたが、私の口にあうようなものばかりで安心しました。特にあんまん、北京ダック、びっくりしたけど魚の胃袋がおいしかったです。

私が中国に来て驚いたのは、トイレです。ホテルは洋式なのですが、レストランの社員トイレに案内してくれた時は本当にがっくりしました。そこには…ドアも閉まらない所で溝があるだけ。そのトイレは、ニイハオトイレでした。私たちは入る勇気もなく友達と走って逃げて来ました。“あー、すごいトイレだった。”

～初めてのホームステイ～

ホームステイでは、言葉が通じなく困りましたがとても楽しかったです。でも、食事の一つ辛いものがありました。それは、“中国風激辛焼鳥”（自分で名付けました。）それは名前通り「辛い!」。見た日も辛そうな食べ物だったので、私は食べたくなかったのですが、友達や家族の人たちが、

「TRY!/TRY!!」

と言われたので、恐る恐る口の中に…すると口の中にとがらしの辛みが広がり、がまんするのに精一杯でした。次の朝、家族の人たちと別れる時は、とても悲しく少し泣きそうになってしまいました。張さん一家の笑顔は一生忘れません。本当に感謝しています。

まだ、書きたいことがたくさんあるのですが、書くと思ったら原稿用紙十枚以上使ってしまうので、このへんでペンを置こうと思います。

最後になりましたが、蓮井団長先生をはじめお世話して下さいました皆様方に感謝します。そして、十九人の素晴らしい仲間とめぐりあえてよかったと思います。また、どこかでお会いしましょうネ。ありがとうございました。最後の最後に一言『中国はやっぱりデッカイ国だった。』



南昌第三中にて



私は以前から中国へ行ってみたくて思っていました。中国についての知識は全くありませんでした。私の知っている中国語といえば、『謝々』『你好』ぐらいだったのでこんなことで本当に中国で交流をしたりホームステイをしたりできるのか不安でした。

そんな不安の中3月27日高松を出発しました。

中国へ行って一番強く印象に残っていることはやはりホームステイでした。

ホームステイの先の钟鷺さんはとても英語が上手でした。でも私の英語が下手なせいかあまり通じず、メモ帳に絵をかいいたり、漢字を書いたり、ジェスチャーをしたりいろいろなことをしてなんとか伝えました。

钟鷺さんのお友達もたくさん遊びに来ていて一緒にうたを歌ったり、ダンスを教えてもらったりしました。中でも一番盛り上がったのは日本の歌手の話です。中国の雑誌にものっていて、紙に「酒井法子」「工藤静香」などとたくさんの人の名前を書いたらだいたいの人を知っていたのでとてもおどろきました。

夕食では多くの中華料理を出してくれました。レストランなどで食べた中華料理とはちがって少し不思議な味がしました。はじめはどうなるかと思ったホームステイだったけれど、あっという間に終わってしまいました。ホームステイがうまくいったのも钟鷺さんの家族が言葉も習慣も違う私たちをあたたかい心でむかえ入れてくれたからだと思います。本当に感謝しています。又、機会があれば会いたいと思います。

最初は不安でとまどうことばかりでしたが、日がたつにつれて不安はなくなり、少しだけ自分自身に自信が持てたと思います。自己紹介の時も最初は少し照れがありました。でもホームステイの時ぐらいになると照れはぜんぜんありませんでした。「なんとか伝えなければ…」という気持ちが強かったからだと思います。もし、このようなすばらしい体験ができなかったら私は何事にも積極的になれなかったような気がします。

中国にいた8日間、本当にたくさんのことがありました。体調をくずして中華料理を食べられなくなってしまったり、ホームステイした時に自分の伝えたいことがなかなか伝わらなくて困ったり全部が全部楽しかったとはいえませんが、私にとってとても貴重な経験になりました。この経験を無駄にせぬよう何事にも挑戦していきたいです。このように楽しく、又勉強になる訪中ができたのも蓮井団長先生を始め引率の先生方、中国でお世話になった張さんそして何よりも団員みんなのおかげだと思います。本当にありがとうございました。





中国での八日間それが今私の心の中で静かに甦っている。

二日目、私は確か八達嶺に立っていた。その風格や大きさ、それは私の予想なんか足元にもおよばないほどでした。

三日目は天安門広場へ行ったような気がします。北には天安門そして故宮、西には日本でいう国会、南には毛沢東記念館、東には歴史博物館がありそのどれもが私の考えていたものよりも大きくとてもきれいでした…外見だけけど!!

四日目は南昌市人民政府を表敬訪問しました。そこでおどろいたのは南昌市の二つの計画でした。一つ目は南昌市の大きな駅をつくるという計画、二つ目は南昌国際空港をつくる計画でした。私は南昌国際空港の計画の方をひそかに期待しています。なぜなら高松と南昌との距離が短くなりもっと友好が深められると思っているからです。

五日目、南昌市第二中学を訪問する。この学校内には八一の一部があり今では国家級の重要文化財となっているそうです。原則は開放で自主自立の精神も育てていて外国への留学生、博士の資格を持つ者が三百名その他大勢の者みんながエリートだと聞いた時はとてもおどろいたと共に自分の愚かさにショックをうけました。

その夜…私が一番楽しみにしていたホームステイでした。ここでは崔明君とその友達十名と共に食事をしました。(很好吃)家庭の味が出ていてよかったゾ…ウンウン…食事が終わるとトランプをした。ここでもおどろいたのは全部で五十四枚のトランプを二組使用してゲーム開始…勝って負けて笑ってそして交流を深める…二時間ぐらいアツというまに過ぎ去った。中国の各家族ごとに風呂は無いようです。だから近くのホテルらしき所へシャワーをあびに行きました。その後は崔明君、李杰君、夏麟君と私でいろいろな話をしました。私にとって印象深いのは三人に日本語を教え三人から中国語をおそわったということです。你好、再冗、您早、謝謝、晚安、很好吃、吃做などから入ったのですが彼らはこんにちわと言ったらそれをあて字でしかも熱心に覚えていました。私は今でもあの時の彼らの姿が目にかぶようです。

六日目の朝、二中で私は崔明君一家にあいさつをすませ、バスにのり、この日はわけの分からないまま上海へ着き、知らないうちにねむっていました。

七日目はショッピングでした。おみやげやいろんな物を買ってまくって破産しそうになりました。

八日目、帰国。最後まで世話になった張さんと曾さんとの別れはつらかったです。

「元気ががんばって下さい。」と言われた時は上を向いても涙がこぼれ落ちるような思いでした。その後はポーとしているうちに高松についちゃいました。

实在麻煩侬子 感謝不尽 多謝多謝 再冗



上海の港で



三月二十七日、私は中国へと旅立った。中国についてのわずかな知識は不安をつのらせたが、好奇心旺盛な私は期待と喜びの方が勝っていた。

今思うと、中国はすべてに於いて、感動を与えてくれた。すばらしい数々の体験、それが、私の心の中にぎっしりと詰まっている。

八日間の旅の中で“ベスト3”をあげるとしたら？そんなランク付けなどできないくらい全てが私にとっては第一位である。教科書で見た万里の長城は、想像をはるかに超え、高い石の塀が、視野に収まらないほど遠々と、山谷を駆け巡っていた。この工事にたずさわった人々の労力は、いかばかりのものであったらうか、と感心せずにはいられなかった。芸術的要素を兼ね、物を造ることに対しての中国の人の粘り強さ、根気強さは故宮でもうかがえた。九千九百九十九部屋もある宮殿は私を古代へ誘い、最後の皇帝となった愛親覚羅薄儀に思いを馳せられた。どの建造物も広大な大地を有する中国ならではの大きさであった。しかし大きいのはそれらの物ばかりではなく、また中国の人の心もそれ以上に寛大にして寛容であったと言える。

南昌市第三中学校では、はたして異国の学生とどれくらいの交流ができるのだろうと、不安な気持ちで望んだけれど、心から待ち望んでいたような熱烈歓迎を受け、異邦人の私達を、人間同志として、大切に扱ってくれる中国の人の温かい心や、思いやりが伝わってきた。私が、ここで一番教えられたものは笑顔の大切さである。堅く緊張していた私を救ってくれたのは、生徒さんの優しい笑顔だった。「顔はその人の行き方や心を写し出すもの、美しい笑顔は人を幸せにする最高の顔よ。」私が母に度々聞かされる言葉だったが、本当にそのとおりで実感した。

ホームステイ先の冉郑さん宅では、みんなで、夕食のギョウザを、テーブルいっぱい作った。中国の食文化を伝えようと、考えた末のもてなし方であったのだろうと思うと、感謝の気持ちでいっぱいになる。食後の団欒は、お父さんが先頭を切って、カラオケで歌を歌ってくださった。中国語でどんな内容の歌なのかは、さっぱりわからなかったが、お父さんは心から歓迎していることを歌により表現し、和やかな雰囲気作りに気を使ってくださっているのが、とてもうれしかった。私も、フルートを吹いたり持参した和紙を用いて、日本人形の折り方を教えたり、とても楽しくそして新鮮な団欒を味わうことができた。途中南昌市の副市長さんが通訳の人と一緒に訪ねて来られ、突然な事に驚いたが、副市長さんと握手をしながら、中国のこと、南昌市のことを、もっともっと、多くの人に知ってもらえるように、私は報告することを約束した。

翌朝、別れぎわにお母さんが、日本語で「サヨナラ。」と言われたが、私は胸がいっぱいになり、「マーファンニラ。」—お世話になりましたと言うのが精いっぱいであった。そして、冉郑さんに頂いた西遊記に出てくる四人の陶器のお人形は、思い出と共に生涯の宝物となった。



上海の豫園にて

心温かく、さわやかだった中国の人々とのふれあいの旅は、私がこれからも学んでいく過程に於いて、大きな心の支えになったのは言うまでもなく、私達は、地球上の仲間なのだから、これからも中国と日本が、いいえ、全世界の国の人々と、次代を担う私達が、交流を積み重ね、文化や、平和を、わかち合っていくことが、一番大切なことであると思った。

最後に、私を中国へ導いてくださった多くの方々と、心配をかけた団員の皆様に、ありがとうございます。



八日間の日中友好を目的とする旅行から帰り、日本の生活にもどるとなると寂しさを感じた新学期。私の心の中に、鮮明に生きている思い出をかべながら私は「中国にまた行くぞ。」と心にちかいます。

中国へ出発する日を思い出してみると、うれしさとワクワクする気持ちと、緊張でドキドキする気持ち。そして、今回の旅行の目的の日中友好を深めるために出発するんだという責任感で頭がいっぱいでした。

そこから私の貴重な体験が始まりました。

教科書の中だけでなく、生きた歴史を学習することができて感動しました。前から行ってみたいと思っていた憧れの「万里の長城」にはおどろきながらも急な傾斜を息をきらしながら必死に登って行きました。

「百聞は一見にしかず」この言葉は万里の長城にぴったりだと思いました。さすが五千年の歴史を持つ中国だと再び感動しました。

天安門広場、明の十三陵など中国での思い出は数えれば切りがないほどたくさんあります。その中で私にとっての一番の思い出はホームステイです。

ホームステイの前日の夜、英語の苦手な私にとって言葉が通じるかは不安でした。

ですが私と平尾さんのホームステイ先の周桓さんの御家族はみなさん心のやさしい方々だったことと、平尾さんに助けられ、どこかへ私の不安は吹き飛んでいきました。

なれない日本語で話しかけて下さる姿を見て、もっと私も中国語を勉強しておくべきだったと後悔しました。この日の夜はたくさんの友達と、花火や卓球をして楽しい一時を過ごしました。そして部屋に戻って平尾さんと私は「明日、別れるのつらいなぁ」「私、泣くかもしれない」と話しました。



ホームステイ先で

パッと目がさめるといつの間にか別れの朝がきていました。

心のこもった朝食を頂いた後、お礼とお別れのあいさつをしました。その時、周桓さんの言った言葉「See you again.」その一言が忘れられません。別れが悲しくて私はやっぱり泣いてしまいました。周桓さんとお母さんがやさしく肩をだいてくれました。

言葉がうまく通じなくても心は通じること。

今、あたり前のように言っていますが、きっと中国へ行くまでは考えたこともなかったと思います。八日間、私たち使節団員二十名は中国を自分自身の肌と心で感じる事ができたと思います。中国での思い出は心の中の宝物です。この旅行で得た友達と国境を越えて友情を深めていくことによって国際交流をすると共にこれからの国際社会に貢献していければと思います。

最後になりましたが、たいへんお世話になった先生方、お礼を申し上げます。

ありがとうございます。



この中国への旅行は、僕にとって初めての海外旅行で二回の事前研修では、知らない顔ばかりで大変緊張していたが、高松から大阪、大阪から北京までの移動では、なんだか少しみんなの顔も緩んで会話が弾んできた。

北京に着いた時、第一印象からして日本とは、広大さなどが、全く別世界だった。

その日は、中国では、最も豪華といわれる北京の中心地郊外のホテルに泊まり、案の定、おもわず「ゲッ！」と言い出しそうな事に直面した。水の色が少し茶色っぽく、味も微妙だったのである。こんな事は、後のホテルでも起こった……。

二日目に見学する明の十三陵や万里の長城は、教科書などでしか見ることができず、それが実際に見れるなどとてもワクワクしていた。

特に万里の長城の急な階段には、苦勞した。

北京を離れ南昌に着き、いろいろと見学地を観光したが、やはり忘れることのできないのは南昌第三中学校で異国の人としては初めて友達になった林立君、会話をするのに慣れていたころには、もう十分、心が通じ合っていただろう。また、交流の時、僕は、恥ずかしさを忘れソロで「思い出がいっぱい」を歌い、みなさんからの拍手は、とても気持ち良かったです。次の日、まちにまった南昌第二中学校でホームステイ先の天天声君に出会いました。

そこでは、いきなり先生が第二中学の生徒と頭だけを使うバレーをしろと言うので自分なりにがんばってみた。みんなは、ゲームのつもりでやっていたようだが、僕一人、試合気分でやっていたので少し恥ずかしかった。

天天君の家に着くと妹さんや友達と知っている歌を歌ったりしてとても楽しい時間を過ごした。この時、英語やささいな中国語また、身振り手振りでも必死に伝えようとして、理解し合えた時の喜びは言葉に表せないほどで国を越えての友情がより深まったような気がした。

翌日、第二中学校でまたいつか会おうと心に誓い合った後の別れがとても悲しかったです。

この旅行では、中国の人、一人一人が必死に生きていこうとする姿が、とても印象強かったように思います。

また、日本文化の基は、中国からが多いということで中国の歴史の深さを大いに感じ、より身近に思われる点も多かったのでは、ないだろうか。

中国で過ごした八日間、あっという間に終わってしまい、学んだ事は覚えきれないほどあるが一つ一つを大切にこれから国際社会に生かせたらと思います。

最後になりましたが、この旅行で引率して下さった方々、また陰で見守ってくれた方々にお礼を申し上げます。謝謝。



張さんと天安門広場で



中国に着いて万里の長城を見た時に、やっと「中国にきたんだ、！」という実感がわいてきました。険しい山道に、どこまでもどこまでも続く万里の長城。息をきらしながら登ってみると、雄大な自然が私の目の中に飛びこんできて、中国の長い歴史を思わせるような荒々しく力強い風が体当たりしてきました。私はうれしくてたまらず、その風を、いや中国という国を体全体で受けとめました。故毛主席が述べた「長城に来ずば、豪傑にあらず」という言葉にも「うん、うん。」とうなずけるような気がしました。日本とは違う広大な中国に来ることができて、ほんとうによかったとこの時、何度も思いました。

中国は土地が広いだけではありませんでした。そこに住む人々の心も万里の長城のように雄大なのです。私はこの旅でそんな心にたくさんふれることができました。

まず、最初は南昌市第三中学で、門をくぐると手に花をもった生徒さんたちが、ずらっと並び声をそろえて私達を歓迎してくれました。初めて会った私達にここまでしてくれた南昌市第三中学のみなさんの気持ちに強く心をうたれました。交流の時には、学校で習った英語をはじめて使いました。私の質問に、

「Yes、！」

と笑顔で答えてくれたときの喜びはとてつもなく大きいものでした。

次は南昌第二中学。ホームステイという貴重な体験ができるということなので、旅行に出る前からすごく楽しみにしていました。

迎えに来てくれたお父さんはとてもやさしく、握手した手のあたたかみと大きさは知らない人の家に行く私の不安をとかしてくれました。家に着くとさっそく紙に英語や絵をかいての交流がはじまりました。早口の中国語の中でとまどっている私に、ドラえもんや貴ノ花などの絵をかいてくれたりして、楽しいひとときがあっという間に過ぎました。

次の日の朝は、ほんとうに短い時間をいっしょに過ごしたただけなのに、別れがおしく、何度も「Please write to me」

と言いました。バスに乗り、姿が見えなくなるまで手をふっていると、目頭があつくなってきました。私は、このホームステイをとおして「友情に国境なんて関係ない。心さえ通いあえばそれでいいのだ。」と、強く確信しました。

この他にもあっと驚くような演技を見せてくれた南昌市体育運動学校のみなさんや、私達日本人と中国人とのかけ橋になってくれた張さんなどたくさんの人達との心のふれあいがありました。

今回の旅で学んだすばらしい経験を生かして中国の人々と約束した「中国のよさを多くの人々に話す」という大事な任務を背負ってこれからの国際社会のためにつくそうと思います。最後になりましたが、お世話になった方々、どうもありがとうございました。謝謝。



ホームステイ先で



私は、今すぐにも、出発して北京に着いた時の興奮を思い出すことができます。そして、今になっても、まだ中国にいるような気がしてなりません。

初めの、二・三日目までは、けっこう長い八日間になりそうだと思っていましたが、そうでもありませんでした。四日目からは、日の経つのがとても早く感じられました。

私は、中国という国にはもちろん訪れたことなどありませんでした。映画でしかみたことのない風景を目の前にして、ただただ、驚きが絶えませんでした。その中でも、一番心に残っているのは、なんといってもやっぱり万里の長城でした。社会科の教科書でしか見たことのない場所だったので、自分がその万里の長城を登っていると考えるようにも考えられない状態でした。

また、南昌では学校に行きましたがどこの学校でも、ものすごい『熱烈歓迎』で、迎え入れてくださいました。バスから下りた瞬間、ものすごい歓声が飛んできて、生徒たちの長い列の前を通りました。私は、こんなに盛大に迎えてくれるなんて思ってもみなかったのでうれしくてうれしくて、ものすごく感激しました。

第三中学校の生徒さん方の交流会では、英語が思うようにしゃべれなくて、ノートに漢字を書いて交流しました。私はその時、“もっと勉強しとけばよかった”とものすごく思いました。

南昌第二中学校の生徒さんの家にホームステイに言ったとき、おどろいたのは、ほんとうに英語がペラペラということです。まるで、日常に使う言葉が英語みたいに思えるくらいでした。

また、南昌体育学校では、小さい子たちがバク宙をしたり、ダンスをしたりと、ものすごい“努力の結晶”を感じました。私もこれから“努力もしないでやめる”のではなく何事にもチャレンジ精神を抱くことが大切だと思い、またそうすることに決めました。

今回の八日間の旅は、私の一生のアルバムの中に大きく残る旅になったと思います。いつも人に頼ってばかりいた私でしたが、今回の旅行で“自分のことは自分でする”という言葉、私自身の第一目標を、少しは守ることができたかな(?!)とっています。

私は、この八日間をずっと覚えていることでしょう。

最後に、一生に残る経験をさせてくださった、先生方、高松市国際交流協会の皆さま、そして団員のみんなに、お礼を言わせてもらいます。

本当にどうもありがとうございました。

そして、See you again!



